

タラノキの育苗開始時期が収量・品質に及ぼす影響

齋 藤 克 哉・丸 子 武 志*・岡 部 和 広**

(山形県農業研究研修センター・中山間地農業研究部・*山形農業改良普及センター・**新庄農業改良普及センター)

Effect of Date of Raising Seedling on Yield and Quality of Angelica Tree

Katsuya SAITO, Takesi MARUKO* and Kazuhiro OKABE**

(Department of Hilly and Mountainous Areas Agricultural Studies, Yamagata Agricultural Research and Training Center・*Yamagata Agricultural Extension Service Center・

**Sinjo Agricultural Extension Service Center

1 はじめに

農業を取りまく状況が年々厳しくなる中、特にこれまで稲作を基幹作物としていた中山間地帯では、その度合いが一層深刻になってきている。

このような中、山菜は安全でヘルシーな食品ということで年々消費が伸びており、また本県産山菜は関東、関西の市場で高いシェアを占めている。このような需要動向を背景に本県では、特産の「山菜」を中山間農業の最重点品目として振興している。山菜の中でも「タラノメ」は、生産量、販売額とも全国一の産地であり、また栽培技術も高く先進県として評価を受けている。現在も、新興産地を中心に生産意欲が高く、栽培面積も伸びており、「山菜王国山形」の代表品目となっている。

これまでに、タラノキを栽培する上で、大きな課題であった、定植一年目の欠株対策として、再生紙を使用したポット栽培技術を開発した¹⁾。

しかし、タラノキ栽培では定植一年目は株養成期間として、穂木生産はほとんど行われていないのが現状である。そこで、ポット育苗技術を利用して、定植一年目から収穫可能でより安定した収量を得る技術を確立するために、育苗開始時期の違いが、収量・品質等に及ぼす影響について検討した。ここに、その結果の概要を報告する。

2 試験方法

- (1) 試験場所 山形県新庄市
山形県農業研究研修センター
中山間地農業研究部内ほ場
- (2) 供試品種・系統 「蔵王2号」「あやの」
- (3) 区の構成

区 名	育苗開始日	定植日	育苗期間
2月育苗	2月7日	5月14日	69日
3月育苗	3月11日	5月14日	64日
4月育苗	4月9日	5月14日	36日
5月育苗	5月7日	5月14日	38日

(4) 供試条件

1) 種根採取時期

1998年11月

採取した種根は、ビニールで乾燥しないように密封し、5℃の冷蔵庫で保存した。

2) 種根の育苗

種根を5cm程度に切り、育苗箱に培養土を入れ一列に並び、かん水し、20℃で管理した。芽が20mm程度に伸びたら再生紙ポットに鉢上げし、乾燥しないように適度にかん水し、20℃前後で管理した。

3) 栽植密度

うね幅200cm, 株間60cm, 1条植えとした。

4) 施肥量

N, P₂O₅, K₂Oとも全量基肥として1.5kg/aを施用した。

5) 穂木収穫

1999年11月18日に行い、収穫した穂木は、作業舎で乾燥に注意し保存した。

6) 促成

1999年12月6日から開始し、0.05mmポリ+0.05mmUVカットビニールでトンネル被覆した、電熱温床を備えた温室内で行った。

3 試験結果及び考察

(1) 定植前の生育

区による大きな差は見られなかったが、2月育苗区で育

表1 定植前の苗生育

区 名		草丈 (cm)	葉数 (枚)	葉長 (cm)	茎径 (mm)
蔵王2号	2月	3.8	2.6	24.4	6.1
	3月	3.8	3.4	25.1	6.2
	4月	3.2	3.4	21.4	5.8
	5月	3.3	2.8	19.4	5.8
あやの	2月	3.0	3.2	28.1	7.5
	3月	4.0	3.0	26.5	7.6
	4月	3.1	3.2	28.8	7.6
	5月	3.3	3.4	27.0	6.5

苗の後半、下葉に肥料切れによると思われる黄化が見られた(表1)。

(2) 穂木収量

穂木の重量は‘蔵王2号’、‘あやの’とも5月育苗区が軽く、このため一駒重も劣った(表2)。

(3) タラノメの収量及び品質

全重は、2月育苗区が最も重く、育苗期間が長くなるほ

ど重くなる傾向にあった。

商品化率は、‘あやの’の2月育苗区が最も高く、‘蔵王2号’の5月育苗区が最も劣った。

10a当たりの収量は、‘蔵王2号’、‘あやの’とも育苗期間が長くなるほど増収し、特に‘あやの’で著しい傾向にあった。品種、系統により異なるが、総じて従来の5月育苗と比較して、2月育苗区が約110%、3、4月育苗区が約35~90%収量の向上が認められた(表3)。

4 ま と め

以上のことから、タラノキの育苗開始時期は、従来の5月育苗と比較して、育苗開始時期を早めることにより、1年目から従前より安定した収量、品質が得られることが明らかになった。

引 用 文 献

- 1) 丸子武志, 齋藤克哉, 岡部和広. 1999. タラノキの育苗法. 東北農業研究 52: 227-228.

表2 穂木収穫時の生育

区 名		穂長 (cm)	重量 (g/本)	穂径 (mm)	側芽径 (mm)	芽数 (個/本)	一駒平均重 (g)
蔵王2号	2月	112	598	32	5.4	19.8	30.2
	3月	113	564	31	5.1	21.4	26.4
	4月	112	584	31	5.1	20.6	28.3
	5月	105	370	26	5.2	15.6	23.7
あやの	2月	139	638	29	6.8	20.8	30.7
	3月	140	600	28	6.2	21.8	27.5
	4月	133	502	27	6.2	19.8	25.4
	5月	125	344	23	6.0	16.2	21.2

表3 タラノメの収量及び品質

区 名		1芽当たり			穂木10本当たり			商品化率 (%)	10a当たり 商品収量 (kg)
		全重 (g)	全長 (cm)	茎径 (mm)	総重量 (g)	商品化重 (g)	クズ重 (g)		
蔵王2号	2月	4.2	6.1	14.7	279.5	229.3	50.2	82	32.1
	3月	3.7	6.0	13.3	277.8	205.6	72.2	74	28.8
	4月	3.6	5.9	12.7	275.2	187.5	87.7	68	26.3
	5月	3.5	6.0	13.3	186.4	104.1	82.3	56	14.6
あやの	2月	5.2	7.4	14.1	485.1	466.9	18.2	96	65.4
	3月	4.3	7.4	13.0	406.4	377.8	28.6	93	52.9
	4月	4.1	7.1	12.3	338.5	298.8	39.7	88	41.8
	5月	3.9	6.9	12.6	254.7	219.6	35.1	86	30.7